

第6回「文芸思潮」現代詩賞 発表

第6回「文芸思潮」現代詩賞

第六回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございます。おかげさまで今年も日本全国および海外から七四八名という多くの方にご応募いただき、充実したコンテストとすることができました。心から御礼申し上げます。

五月末に締め切らせていただきました応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれました。それらを通じた作品を対象に、九月十二日、嶋岡晨、松尾真由美、五十嵐勉の各選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。なお、今回も応募数が多かったことから、引き続き「佳作」を設け、すぐれた作品をより広く顕彰することにいたしました。

奨励賞および佳作の作品の中にも多くの方に読んでいただきたい作品がたくさんありますので、それらの作品も、できるだけ「文芸思潮」ウェブおよびインターネット誌上に掲載させていただく予定です。御期待ください。

現代詩賞の授賞式は、銀華文学賞、エッセイ賞と併せて、明年一月二十三日午後二時より東京神楽坂の日本出版クラブ会館にて行なう予定です。受賞者以外の方も受け付けておりますので、お誘いの上ぜひ御参加、御来場ください。

第七回「文芸思潮」現代詩賞は、明年二〇一一年も今年とほぼ同じ要領で募集を行ないます。締め切りは五月三十一日です。どうぞ奮って御応募ください。

「文芸思潮」現代詩賞選考委員会／文芸思潮

当選

「父を掘る」

江口久路

(京都府京都市)

「空／」「校庭世界」「巻く 夜」

アン阿部

(東京都豊島区)

優秀賞

「忘れ蟹」「朱い笹舟」「渡る記憶」

後藤 順

(岐阜県岐阜市)

「地球脳賛歌」「ひかるはるはち」「ただいま 人類」

平岡靖生

(福岡県福岡市)

「コトバ剥離」「消滅宇宙」「ゆがむ視界」

榊 一威

(山形県寒河江市)

奨励賞

「ジェルメデイウムで出来た君の微笑みと悲しみの肉体からだ」「集団ダイエット」

ユリコラケプトン

(大阪府堺市)

「二月」「如月」

仁科修治

(香川県三豊市)

「源流」

清水一美

(東京都立川市)

「鏡」[4.0 × 3.0]「JIGOKUHEN」

木糸ゆさ

(東京都杉並区)

「蝶の水葬」「魚の語法」

舟橋空兔

(愛知県尾張旭市)

「感覚理論戦争」「冬の再生」「運命」

フクダノゾミ

(神奈川県藤沢市)

「少年の息で砕け散りそうな」「点在しているライトの目」「星のキス」

岡崎 師

(北海道札幌市)

「伸長」「黎明の黒き瞳」

川原 歩

(神奈川県海老名市)

「マスクの世紀」

後藤敏斤

(静岡県富士宮市)

「高橋竹山物語―津軽三味線一代―」

福地順一

(北海道札幌市)



選評



しまおか しん

1932年高知県生まれ
詩人 フランス文学者
53 大野純らと「猿」を
創刊 形而上学的な叙情詩
をめざす
65「永久運動」で岡本弥
太賞
99「乾杯」で小熊秀雄賞
元立正大教授
著作に「嶋岡晨詩集」「現
代詩の魅力」小説「裏返し
の夜空」評論「詩とエロス
の冒険」翻訳に「エリュア
ール選集」などがある

何より「感動」、何より衝撃をいそ

嶋岡 晨

本誌第二回の現代詩賞選評文（池田康）のタイトル、「意表をつく無条件の感銘を」こそは変わらぬ選ぶ側の希望である。新鮮なまるとの感動を求めて、わたしも選に臨んだ。

アン安部（敬称略）「校庭世界」は、小学生時代の記憶に人生の基点を見、それへの自虐的でもある愛惜（哀惜）を、あえて感傷を排したコンクリートな視覚で表出したところが、新鮮。血縁のおぞましさも、共有世界への風刺も、効果的に引き出されている。「巻く 夜」のような試みは小手先の芸となりやすいが、やはり若さの魅力は否みがない。

江口久路「父を掘る」のテーマは、かなり使いふるされたものだが、よくある反抗と批判の対象でなく、〈父〉を労働災害の犠牲の代表者に仕立て、その怨みつらみを〈子〉の意志として引受けたところが、個性的。「魂の断食」といった、古風で解りにくい表現もあるが、〈父の時代〉の実体を真摯に問いつめる姿勢に、感動をおぼえた。第五回の優秀賞をえた「母が舞う」に繋がる必然性がある。

佳作

- 「モノリスT Oタナトス」 「道程との融合」 PE
- 「寒花」 「白黒詩」 「開花」 夢野ホトリ
- 「縁取る眠り」 「永遠の花」 「黒薔薇」 灰根子
- 「空蟬」 「睡眠」 「陶酔カタルシス」 ユビキタス
- 「五月堂」 「五月堂」 五月堂
- 「淪」 「手紙」 「残像」 長尾めぐみ
- 「態は愛を湿す」 「制御」という僕」 織和 求
- 「忘却のための詩」 「湧出のための詩」 伊藤伸太郎
- 「黒揚羽」 「仔犬のぬいぐるみ」 「朱色の花」 吉川彩子
- 「漂流」 「水半球」 中野理子
- 「青の時代」 光城健悦
- 「画家ルソー」 「だまし絵」 「夜桜」 向田若子
- 「死は待っていた」 「艶やかな骨」 「テーマづくり」 松岡希草
- 「de ja vu」 「化之月」 「孤室」 西条由美子
- 「装われた愛」 「針千本」 「マゾの故郷はサドの御胸」 みなみなみ
- 「無念の矛先」 「浮遊散歩」 「毒針」 中川ただし
- 「戒律」 「鬼なるものの畸形に関する解体書」 「火の街」

両者、二十一歳と五十三歳で、世代の隔差もおもしろいが、しかし確実に共にすぐれた表現者である。当選作と認めざるをえない。

優秀賞の方、後藤順「忘れ蟹」には、日常の匂い、労働の臭さ、生活実感がことばの端々までからみつき、そこから人生の詩が滲み出てくる。「渡る記憶」は、世代の変遷がごまかしようもないイメージに造型されて、見事。

榊一威「コトバ剥離」がいい。コンピュータ時代のうつろさの中、自分の心の奥に〈神話〉を創出する、そういう形で科学先行の世態にさからう志向を好ましく思った。

平岡靖生「たぐいま 人類」にも拍手をおくる。息苦しい今日の社会相をくぐりその核心に的確に触れながら、新しい〈人間〉を求める思いがうねり動く。プラス、マイナスめまぐるしい時代的変容の中に、ホンモノをひたすら見ようとする姿勢が見える。ほんと投げこまれた俳句めいた詩句も、ユニークだ。

優秀賞は、あと二、三点の差で当選作となる可能性、表現力を示すもの。その差は、やはり作者の情熱と創作上の工夫にあるだろう。

奨励賞へ移ろう。後藤敏斤「マスクの世紀」がいい。状況への理屈付けが（その論理先行が）しばしば小うるさくもあるが、それらの説明にとどまらぬフレーズが、かえって音楽的な重層化の効果を生む。「鉄のマスク」の恐怖をも強調するのだ。

川原歩「黎明の黒き瞳」。「馬」になりきって、その瞳に人間世界の虚妄をうつし出している。解りやすく、ヒューマンな詩だ。

福地順一「高橋竹山物語―津軽三味線一代―」。この人は第五回の当選作の作者。そのときから一貫して、津軽弁で書いている。津軽方言の詩人は、高木恭造ほかたくさんいるから、その意味では〈個性〉が出しにくい。他国人には解りにくいこと、その反面たやすく土俗性が出せる、そういう厄介な二面性もある。そうした難所を、実在の竹山の伝記というかたちで巧みにくぐりぬけたのが、福地作品。並みの技法ではない。

木糸ゆさ「鏡」。第五回の優秀賞受賞者。今回も捨てがたい輝きを放っている。人間の〈実像〉はどこにあるか、の追求。不自然な表記がかえって妙な効果を生む。

福田のぞみ。わたしは「感覚理論戦争」を採る。題名は大きすぎて固すぎるが、内容（心情の動き）は柔軟でふしぎな美しさを示す。（ブランコ）の一行、ミサイルとコーヒー豆の結びつき、おもしろい大胆な感性。船橋空兎「魚の語法」がいい。音程の「半音外れ」たような、相互の認識と表現のズレ―そのすき間を泳ぐ魚たち、というまことに自在な発想。饒舌な、自動法的なうまみ。

ユリコラケプトン「集団ダイエット」。第五回の現代詩賞当選者という。豊かすぎるわれわれの食環境、それはつまり欲望の肥大化で、それに対するダイエットなどという行為のおろかしさが、あちこち飛び散った脂と汗のあさましい模様として、とらえられている。抑制のきいた短い詩句の中に、しっかりと表現された時代相。

仁科修治「如月」。わざと文語調の古いスタイルをとって、現代詩への一つの抵抗体となってみせた、その表現の異質性を、かんとんに見ずにごすわけには、いかない。その一歩先に、何か出てきそうな予感がする。じつにさまざまな独自性の発揮、おどろくべき個我的表現……。全体の作品レベルは、ある種の商業誌の投稿欄などより、かなり高いところにあると思つた。この賞の選出、わたしは初めての体験だが、ひどく疲れた。疲れさせる要素が、たのもし。前衛の試み、新しい技法の展開もけっこうだが、何より〈感動〉。何より必要な衝撃をこそ。





まつお まゆみ

1961年北海道生まれ
個人詩誌「ぶあぞん」発行「歷程」同人
詩集『燭花』（思潮社）
詩集『密約—オブリガート』（思潮社）
で第52回H氏賞受賞
詩集は他に『揺籃期—メッサ・ヴォー
チェ』『彩管譜—コンチェルティーノ』
『睡濫』『不完全協和音 consonanza
inperfitto』『雪のきらめき、火花の湿
度、消えゆく蕊のはるかな記憶を』（す
べて思潮社刊）などがある
アンソロジー『現代詩最前線』（北溟
社）『小野十三郎を読む』（思潮社）『短
篇集 夜』（驢馬出版）
H氏賞選考委員、北海道新聞文学賞（詩
部門）選考委員

個性を活かして詩を生かすこと

松尾真由美

今回、こちらの選考を初めてやらせていただいて、私が興味深かったのは、応募作の年齢層が広いことと、また、その十代から七十代までの書き手たちが、それぞれの年代に合わせた持ち味を良い意味で醸し出していたことだった。詩的実験も詩的落ち着きも、読者を納得させるものであればいい。楽しく読ませていただいた作品も数多い。そうした中で、全体を俯瞰して気になったのは、三篇の作品ごとに詩形を変えてみる応募作が意外に多いということだった。気を付けなければならぬのは、詩の形を変えて書いて、新鮮さを感じるのが作者だけだということもある。現在の詩の状況を鑑みれば、詩の形の実験はなされつくした感があり、そうしたもので新しさはこちらには伝わらない。詩形を変えるなら変えるならの必然性を作品が持たなければならぬ。言葉を練り出すときの自身の呼吸やリズムに敏感になれば、安易に詩の形を変えることはできなくなる。こうしたことを考えてほしいと思う。

当選作の江口久路「父を掘る」は無駄な描写が一切なく、作者の感情的な部分を入れないことで作品のリアル感を増している。「父」の後景にあるものへの執拗な探求が、否定も肯定もない手触りで冷静に行なわれて、詩の緊張感を持続させているが、それは、言葉の呼吸とテーマが歩調を合わせて歩んでいく状態にある。だから、重たい表象が問題意識の深さにつながり、読者に説得力を持つ。テーマととも堅い詩という印象が残るが、実際には色彩の対比なども表され、詩としての表現というものに作者はかなり意識的だと思われた。詩における対象への知的掘削が成功して、理屈抜きで胸に迫る一作であった。

そして、もう一人の当選作者は二十一歳の学生、アン阿部である。若々しい感性が長所として受け止められるのは、詩の身体を素直に開いているからだだろう。自身の興味や関心の行くところを、まっすぐに詩の好機として掴んでいる。阿部の作品は、言葉の運動に無理がなく、情景は実感的なものであるゆえに浮薄さはない。作品「巻く 夜」は言葉の音とともに主体が言葉を発していく様子が良い。言葉との一体感がある。視覚的なものと身体的なものとの交差が詩の世界を広げている。詩の行為が作者の感性を広げるからこそ、散逸した意識があり、そうしたものを詩の言葉で集め直そうとする所作を感じさせる。言葉の運動性に無理がないのはこうした理由もある。書き込めば、もつと世界は広がりを持つ。さらなる展開を期待する。

当選が二人になったが、優秀賞は三人にとどまった。まず、平岡靖生の「ひかるはるはち」。応募作三作の中でこの作品が一番作者は距離を置いたのではないかと考えられる。平岡の場合は、作者と作品の主体が近すぎると詩的感興が沸き立って来ない。それよりも、作者が一步退いた余裕を見せる「ひかるはるはち」の方が、読者に詩の心地良さを与えてくれる。平岡は文学的素養が充分にある。そうした自身の良質な部分を詩に活用すべきだろう。作品はいろいろな手法がうまく合致していて、読んでいて爽快感があった。一行の挿入が効果的に使われている。詩的遊戯と詩的感性が混じり合い、この作者でなければ書けないような独特な味わいを齎している。

後藤順の詩は地に足がついているような印象を持たせるが、それは、自身の血の歴史を自己の認識まで高めようとする主体の目的意識が明確である。平岡の詩は地の足がついていない。作品「忘れ蟹」は行商の女たちの情景から、連を追うことにしつかりとした場面展開が見られ、母親の生きざまが抽出される。そして、その母の周りには死んだ父や兄がいる。母という象徴が家族を浮き上らせているのだ。作者が追い求めているのは現在の作者における家族たちの像であり、詩によって真摯にそれを昇華しようとする姿勢が読者の感動を呼ぶ。

柳一威の作品は読点の使い方に独自のものがあり、それが言葉の流れに拍をつくる。詩の呼吸がそれに伴い、この方法はひとまず成功している。柳の個性として作品に安定感さえ与えているかもしれない。作品「ゆがむ視界」は「ぼく」と「キミ」の儂い関係性が、作品世界の不安感と一体となっていて、ゆがむ視界をあわく象る。会話体で書かれているがゆえに不安さや不確かさがやさしく語られ、ここに終われない歪みの救いを感じさせる。奨励賞は十人の方が受賞した。木糸ゆさの「40×30」はひらがなが効果的に使われ、表象の柔らかなさの中に真実が入っている感触を受ける。主体の動態が言葉の動きそのものとしてあるからだろう。こうした詩は簡単には書けない。この作者は詩の方向性を決めて集中的に詩作に向かった方がいい。

舟橋空鬼の「蝶の水葬」は上質な抒情を感じさせ、ある程度の完成度もある。だが、この分量の作品にしては「夢」という言葉を使いすぎる。一連目はともかく、もともと夢のような話であるからこそ、夢という言葉を使わずに表現してみることが作品に破れ目を作る。その次の段階が見えてくるはずだ。

フクダノゾミの「冬の再生」。作者は個人の感慨や思考から抜けだして、大きな世界を求めているようだ。その志向性には共感できる。だが、重要な役割を負う「きみ」にくっきりとした像がない。そのため、作品に説得力が欠ける。詩人は言葉が先に来るものだが、安易に言葉を置かないように気を付けてほしい。また、河原歩の「伸長」の丁寧な描写に好感が持てた。福地順一の「高橋竹山物語」は方言による三味線（音楽家）一代記として読み応えがあった。

詩は言葉に対する感性や感覚が大切であるけれども、それは適当さとは違う。作品それぞれにあった詩の自由を確保するためには、頭ではなく身

な部分を入れないことで作品のリアル感を増している。「父」の後景にあるものへの執拗な探求が、否定も肯定もない手触りで冷静に行なわれて、詩の緊張感を持続させているが、それは、言葉の呼吸とテーマが歩調を合わせて歩んでいく状態にある。だから、重たい表象が問題意識の深さにつながり、読者に説得力を持つ。テーマととも堅い詩という印象が残るが、実際には色彩の対比なども表され、詩としての表現というものに作者はかなり意識的だと思われた。詩における対象への知的掘削が成功して、理屈抜きで胸に迫る一作であった。

そして、もう一人の当選作者は二十一歳の学生、アン阿部である。若々しい感性が長所として受け止められるのは、詩の身体を素直に開いているからだだろう。自身の興味や関心の行くところを、まっすぐに詩の好機として掴んでいる。阿部の作品は、言葉の運動に無理がなく、情景は実感的なものであるゆえに浮薄さはない。作品「巻く 夜」は言葉の音とともに主体が言葉を発していく様子が良い。言葉との一体感がある。視覚的なものと身体的なものとの交差が詩の世界を広げている。詩の行為が作者の感性を広げるからこそ、散逸した意識があり、そうしたものを詩の言葉で集め直そうとする所作を感じさせる。言葉の運動性に無理がないのはこうした理由もある。書き込めば、もつと世界は広がりを持つ。さらなる展開を期待する。

当選が二人になったが、優秀賞は三人にとどまった。まず、平岡靖生の「ひかるはるはち」。応募作三作の中でこの作品が一番作者は距離を置いたのではないかと考えられる。平岡の場合は、作者と作品の主体が近すぎると詩的感興が沸き立って来ない。それよりも、作者が一步退いた余裕を見せる「ひかるはるはち」の方が、読者に詩の心地良さを与えてくれる。平岡は文学的素養が充分にある。そうした自身の良質な部分を詩に活用すべきだろう。作品はいろいろな手法がうまく合致していて、読んでいて爽快感があった。一行の挿入が効果的に使われている。詩的遊戯と詩的感性が混じり合い、この作者でなければ書けないような独特な味わいを齎している。

後藤順の詩は地に足がついていない。作品「忘れ蟹」は行商の女たちの情景から、連を追うことにしつかりとした場面展開が見られ、母親の生きざまが抽出される。そして、その母の周りには死んだ父や兄がいる。母という象徴が家族を浮き上らせているのだ。作者が追い求めているのは現在の作者における家族たちの像であり、詩によって真摯にそれを昇華しようとする姿勢が読者の感動を呼ぶ。



いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ 像賞
79 「流瀆の島」で群賞
新人長編小説賞
82 「緑の手紙」で読売
新聞・NTTプリイ
テクニク主催第1回新
人賞最優秀賞受賞
2002 「鉄の光」で健友館
文学賞受賞

「言葉の響き」がない

五十嵐 勉

今回の選考にあたっては、「該当作なし」という感想を持って臨んだ。文芸思潮が期待する「天を射抜く鮮烈な言葉」「水晶のように輝く言葉の結晶」「流麗な音韻の調べ」「言葉の響き」は、多くの人に読んでもらいたいレベルとしてはあまり強く感じられなかったからである。

記号や新表記を用いた一見新しそうな技法もあったが、それは新しそうな素振りに終始していて、そこにこめられた現代の苦悩や叫びの内質は感じ取れなかった。いくら新奇な表現を取ろうと、真にエネルギーを内包していなければ、空疎なファッションでしかない。この程度の内質で詩を作ろうとしているのかと、疑いたくなるものがあった。見方がおもしろく、視点や発見が目新しくても、そこに内蔵された人間のエネルギーの発熱や発光の実質がなければ詩としては成立しない。そういう意味で若い世代の作品に脆弱な詩作品が目立った。今回賞金がアップしたが、作品の質はむしろダウンしている。もともと詩作品に、賞金を贈るということ自体が、詩を汚すことになるのかもしれない。真の荣誉は数字では置き換えられない。

いものであることも、あらためて感じざるをえなかった。萩原朔太郎は自分の詩作品をけっして原稿料などと引き換えにできなかったそうである。詩としての言葉は、たしかにそれだけの重みや純粋なものが宿っているべきかもしれない。

生きることに對して、宇宙を含めたこの世界に對して、社会に對して、もっと言いたいこと、斬りつけたいこと、突き破りたいことはないのか、根本的な人間としての反抗のエネルギーが乏しいような気がしてならなかった。無論耐えることは重要であり、その姿勢から生まれる詩もあるだろう。しかしまず言葉が突き破らなくて何が突き破れるのか、みな状況に飼われ馴らされ、牙を丸められている印象が否めない。上位の作品に對して、特にその不満が大きく残った。

今回の当選作でも、その意味で真に私が期待したものはない。アン阿部氏の「空／＼」や「校庭世界」は、／記号を使った技巧や校庭に埋もれている時間や生存を掘り起こす思いつきのよさという点は見るべきものがあるが、それ以上のものではない。時間や歴史を掘り起こすのなら、戦争中の死体が埋まっているかもしれない、戦国時代の首切り場であったかもしれない、時間や地獄の重層を見てもおかしくはないだろう。身辺や身体的なものに留まっている想像力では、時代を超えることはできないはずである。ただ、他の作品に比べて広がりやのびやかさを感じたという点が評価できるにすぎない。むしろ「巻く 夜」のほうに可能性を感じ、若さに今後を期待した。

江口久路氏の「父を掘る」は、古風な表現の中に、過去への執着が文字通り「掘り下げる」執念を感じさせるところに、一つの世界が開かれているとは思った。しかし読み返してみても、その造形が新たな父の像を構築しているかという点、既視感がつきまとわずにはいられなかった。ただ、今回評価できるのは、前回母親を描いて「母が舞う」の構造的掘り下げと呼応する姿を持ち、「父を掘る」との二篇で、一対の詩として確かに立っているという存在感は動かしがたいものがあった。前回のものをも含めた二篇によってこれを評価した。

肉親への遡及という点では、優秀賞の「忘れ蟹」（後藤順）も同じような立脚点を持っている。一昔前の行商を思わせる労苦と郷愁と、母への思えば、一つの方法を開拓できるかもしれない。

「de ja vu」「化之月」（あだしのつき）「孤室」（松岡希草）も言葉の使い方に思い切りのよさを感じられて、姿勢と努力によっては、何かに化けそうでもある。

この世には様々な常識と法則とがある。物体は下に落ちるといふ物理法則は変えられない。光は直進するといふ法則も疑うことができない。しかし真に力のある言葉はこれらの物理法則をも破る。光を本気で曲げようと思ふところに言葉の真の力がある。今回はぜひこういう真の自由を得た言葉に出会えることを期待したい。



慕が、味わい深く滲み出ている。地味だが、染み通ってくる懐情は、肺腑に届く。

平岡靖生氏の「地球脳髄歌」「ひかるはるはち」「ただいま 人類」は、不思議な明るさがつきまとう詩風に興味を持った。地球の滅亡とか、人類の滅亡とか、あつけらかんと見つめながら明るく歌っている、突き放した謳歌が奇妙な白っぽい色調を獲得している。これが何なのか、ただの楽天性ではない、むしろ死と紙一重の何かをくぐってきたところに発する光らしい点にユニークさがある。

奨励賞のユリコラケプトン氏は昨年の当選作がパワフルであったのに対し、今年は迫力に欠けた。「ジェルメデイウムで出来た君の微笑みと悲しみの肉体」が選考会でも最も評価が高かったが、「アアア……」という擬態語が、よく使われる技巧なので、俗っぽくなってしまっている点、また「ジェルメデイウム」という言葉もよくわからない点などで評価を大きく下げた。新しいペンネーム「ユリコラケプトン」もよくわからない。せっかく昨年当選になっているのだから、どうしてペンネームを変える必要があるのか、姿勢にも弱さが出ている気がして残念である。

むしろ年配の詩人に共感を深くした。仁科修治氏の「一月」「如月」は、死をしっかりと見据え、その前に横たわる虚空を冬の風土に重ねて、鋭く斬り取っている、氷の輝きを帯びた凜然とした詩である。韻律もよく、調べも豊かである。一環した骨脈がある。私はこの「如月」と清水一美氏の「源流」に最も高い得点を与えた。

「源流」も、一作品で勝負する気概の込められた力作で、その言葉に込められた詩魂は、並々ならぬものがあって確かな輝きを放っている。「如月」と同様の骨脈がある。途中「です」とか「申します」とかで終わっている部分が強さを損ねてしまつて、調子を弱めているのが惜しまれるが、全体の構成をさらに考えて、後半をもっと構造も加えて調べを高めていけば、規模の大きな深い詩として成立しうるだろう。表現すべきものを持っているように見える。

佳作の中では「寒花」「白黒詩」（夢野ホトリ）のルビを多用した表現におもしろさを感じた。うるさくなく、もっと積極的な使い方を編み出せば一つの可能性たりうる。言葉遊びではなく、魂を込める方向に徹底してい



選考会風景 右より、松尾真由美、嶋岡晨、五十嵐勉の各選考委員